

支部だより

平成 25 年
9月13日(金)
第 25 号

会員
だより



株式会社 南海建設
代表取締役 本田 雅則

当社のボランティア活動!

当社主催のボランティア活動(清掃作業)が今年3年目を迎えました。

第一回目は、協力会社を含め参加者27名でスタートしました。実施一ヶ月前に、清掃場所を決め、管轄する市町村に清掃場所の届け出を行いゴミ袋を貰い受け、実施に備えます。当日は、軍手等、装備品を配布しゴミの分別作業等の説明を行い、清掃活動を開始します。作業中は、水分補給を行いながら参加者全員で協力し行います。作業終了時に、ごみ袋を集積箇所を集め記念写真を撮ります。回を重ねるごとに人数が増え、最近の活動では参加者が50名を超え規模も大きくなりました。

最近では参加者に変化があり親子での参加や夫婦での参加があったりと色々な方が参加するようになりました。

特筆すべきは、当社のホームページをみて一般の参加者に混じり、高校生の参加があったことです。それも地元高校とアメリカンスクールに通う高校生の参加でした。「どうして参加したの」と聞くと「ホームページを見て、自分もボランティアに興味を持ったから」という返事でした。若人たちのボランティアに対する気持ちを聞いて清々しい気持ちになりました。

これからも、老若男女まじえて楽しく活動をおこないたいものです。



高校生も参加!



多くのゴミを収集。見事な成果!!

被災地からの便り

この9月で東日本大震災から2年6ヶ月を迎える。今も28万9千人余の住民が元の場所に戻れず、不自由な生活を余儀なくされている。私たちは、被災者の苦難を思いつつ、未だ収束しない被災地の現状を忘れてはならない。

被災者の思いを紹介します。

きづなに支えられ...感謝の日々

「ふくしま・きづな物語」優秀賞
保原町(浪江町) 明治 輝子

一瞬にして、あの時、ふるさととは壊れてしまった。別れの言葉を交わす事もなく、二度目の夏を迎えた。ふるさと浪江の仲間達は皆、南へ北へと当てもなく散ったままである。いまだに先が見えない浮き草の様な生活が続いている。

そんな中、避難した先々で、いろんな人に出会

い助けられてきた。

あの日は時雨降る寒い夜だった。車で親子、愛犬と野宿していた。すると、近くの女性が、温かいおにぎりを差し出してくれた。その先では、アパートの一室をすぐ貸してくれた男性。又、隣の部屋の学生さんが家具一式を使って下さいと言って置いて、卒業してふるさと北海道へ帰ったこと、アパートの引っ越したその夜から、向かいの女性が、毎日、朝昼晩と温かいご飯に味噌汁、煮物、漬物とそれに風呂まで頂き、家族のように接してくれた事、生活が整うまでお世話になった。知らない土地に来て、こんなに親切にしてもらい家族で涙した。近くのおばさんが毎日新聞を届けてくれた。とてもとても心強かった。五回目の避難で、そして今、好意で一軒家を準備してもらい、庭あり、畑ありの住まいで、自分を取り戻しつつ、生活を繋いでいる。

行く先々で私たち家族は、知らぬ人同士のまるで連係プレーの様な繋がりの中で助けられて生きてきた。夢中で逃げ路頭に迷いながら過ごしてきたあの日、あの時、次々と支えてくれた人たちに凄く絆を感じている。ふるさととの仲間は、大阪、神奈川、宮城へと離れてしまった。そんな中、神奈

荒涼とした風景が広がる。陸前高田市



川に避難している八十五歳の友が訪ねて来た。「会いたかった」思わず抱きあって再会を喜び合った。もう会えないかと思っていた。私も行ける所、山形、千葉へと絆を温めに出かけている。浪江の仲間との絆と、そして新しい絆に支えられながら今は生きている。「有り難う。ありがとう。」何回言っても感謝しきれない絆の中で。

新”うつくしま、ふくしま”県民運動推進会議
「ふくしま・きづな物語」作品集より



魂をゆさぶるような 各リーダーたちの言葉!

- 石岡常一(宮大工、薬師寺金堂再建)

「若者に告ぐ。親方に授けられるべからず。一意専心。親方を乗り越す工風を切磋琢磨すべし。これ匠の道の心髄なり。」

「道具が落ちれば、大工の心も落ちる。」

活動報告・トピックス



①第84回 道路美化・清掃活動

台風12号が接近中、中止か!

第84回道路美化清掃活動を、8月20日に14社19名の参加者で実施しました。台風12号接近中、天候の具合では中止も考えられましたが、「何とかやれそうだ」と決行。ときおり強風にあおられながらも、時間内に無事に作業を終えることができました。



ゴミも風に吹き飛ばされ少ない!



今月の主な活動予定

- ① 9月6日(金)
平成25年度南・北国道事務所との意見交換会
於:カルチャーリゾート・フェストーン
- ② 9月17日(火)
第85回道路美化・清掃活動後半グループ

編集室から

N・S

2020年のオリンピックの開催地が東京に決定しました。1964年の東京オリンピック以来56年ぶりの式典に日本中が歓喜しています。早くも開催に向けての経済波及効果を取りざたされ、開催までの7年間でおよそ3兆円が見込まれるといわれています。国立競技場を含む各種スポーツ関連施設や道路などのインフラ整備を中心とした、大型の公共工事が次々と発注されることを期待して建設業界は久しぶりの朗報に沸き立っています。

しかし、喜んでばかりもいられない事情も多く存在します。投資額のほとんどが東京を中心とした都市圏へ振り向けられると、東京への一極集中を加速させる結果となり、地方との格差をさらに拡大させるのではないかと、建設資材や建設作業員の不足、労務単価が急上昇するなど、建設業界の不安定要因にならないか、また、これらのことが被災地東北の復興の足かせにならないか、という懸念もあります。福島原発の放射能汚染問題も、開催までに解決できるか未知数です。

何はともあれ、オリンピックが未来の若者に、将来の日本に希望を与える国際一大イベントであることは間違いありません。沖縄経済への波及効果も大いに期待されます。那覇空港の第二滑走路も2019年に完成する予定です。建設業界でもこれを機に、若者の関心が向けられるのではないかと、労務単価がより改善されるのではないかと期待もあります。

まだ先は長いですが、注視していきたいと思っております。

